

サンショウウオ

奈良 敏行



十月三日(二〇二四)の定有堂教室「読書室ビオトープ」の課題本は、朝比奈秋『サンショウウオの四九日』だった。芥川賞を受賞したばかりの話題の本だ。報告は吉田達彦さんだった。

一人分の身体を左右で分け合って生きる「結合双生児」の姉妹の物語だ。奇妙な話だが伯父と父も「胎児内胎児」として生まれたという説明を聞けば、そういう世の中になったのかと受け入れてしまう。

着想が奇抜なので純文学の枠に納まるのかと心配するが、わたしたちの文化はカフカの『変身』や井伏鱒二の『山椒魚』を持っているので、そうした文学の懐の深さが許容してくれる。読書会の若い人たちは『山椒魚』を知らなかったのが少し驚きだった。

著者の主張というか哲学は何だろうと考えた。二つあるのかなと思った。一つは「意識はすべての臓器から独立している」という著者の気づき。著者は消化器内科が専門の

医師。植物状態で生きつづける人たちを目にし、そのような結論の問いにいたる。結合双生児の姉妹は臓器を共有しながらも二つの意識を獲得している。意識は臓器に依存しない。結末は片方が臓器的存在を手放し意識だけ洞のように閉じこもる。それはひとつの解放なのだ。

もう一つは、選評で川上未映子が言っているように「誰も経験したことのない身体と精神の在り方や来し方行く末が、焼かれてしまつて骨壺に入つてしまえばそうでないものもみなおなじという入れ子のささやかな着地」、ここに「頭ひとつぶん抜けた挑戦のあとがあるのは確かか」という「いのち」の出口だ。

わたしたちの存在そのものが奇妙なのだ。井伏鱒二の山椒魚の存在と同じように。カフカの変身した現存在も奇妙だ。しかし慣れてしまえばザムザの変身も日常性に受け入れられてしまう。洞に閉じ込められた山椒魚と蛙の不条理な状況の憤りも年月を重ねれば「もう駄目なようだ」と境界を受け入れあう。

出口は、人は変化を受け入れるということだろうか。人間も環境も生成変化の相のもとにあるのだ。何があつても不思議はない。とすると入口の生成変化の兆しも、文学的感受性はいち早く気づいているという、共通した世界観がここにはあるのかもしれない。

生成変化を受け入れよう。「いのち」は身体を追い越し、身体に追いつかれて終わる。長い年月を生きてそのように考えるようになった。「いのち」はどこにあるのだろうか。鏡像的に自我が形成され、やがて形成されたものから解き放たれていくのが「いのち」の循環だろうか。

「いのち」の発現だった「本屋」の仕事がだんだん記憶から遠ざかっていく。「いのち」は臓器から独立しているように、「本屋」という「身体器官」から放たれて、「機械（いのち）」はある。

生成変化の道しるべとして「身過ぎ世過ぎは草の種」ということばを大事にしてきた。「いのち」の流動を感じるからだ。欲動が上昇し拡大する指向性のもので発現するので、変化は「縮減」という出口へ向かう。「書店」から「本屋」へそしてその先に「本や」という「いのち」につり合う何かがあるのではないかと想像をめぐらす。

偶然だが十月に入ってその「いのち」の一つの形態に出合った。定有堂ビルには今も変わらず「定有堂教室・音信不通編集部」という事務室が存在する。隣にはSHEEPSHEEP BOOKSという十坪の本屋が時を同じくして誕生した。定有堂書店の開業は四十四年前の十月だった。その同じ十月に、隣の本屋さんの中に「定有堂」という屋号の「棚貸し」の一箱のコーナーが生まれた。見立ての「本や」だ。呼び

かけたら直ぐさま十数人の友人がこの趣向に同調してくれた。未来の本屋の進化形は「成功しなくてもいい本屋だ」と言いつづけてきたが、ふと気づくといまいまここにそのものがそうなのではないかと驚いた。

「淡雪」のその中に「沫雪」がある。何一つ具体的にないその予感が、一年立つてここへと導いた。この定有堂の「本や」棚の写真をアメリカの啓三さんに送ったら、その「遊び」面白いですねとメールが返ってきた。

《なんで面白いのか、英語脳で考えると self-mocking という言葉がすつと出てきますが、日本語に「自嘲」と訳すと全然違う気がします。》

日本語脳なら「アイロニー」かなと思った。石橋毅史さんはこんな感想を寄せた。

《SHEEPSHEEP BOOKSさんがシェア書店コーナーをつくり、そこに「定有堂」の棚もある、なんとも不思議というか、でもこれだけでも定有堂の店内を思い出すような……》

じつは案外本気なのだ。この「本や」は「沫雪」のホログラムだが、このことをしばらくは考え続けて行きたいと思う。

(参考)

2024.10.10